

農林水産大臣賞受賞

長寿を目指す里・下～生きがいを持ち健康で明るく暮らすむらづくり～

しもしゅうらくし えんじぎょういいんかい
受賞者 下集落支援事業委員会
(京都市南丹市美山町)
なんたん し みやまちょう

■ 地域の沿革と概要

南丹市は、平成18年1月1日に園部町、八木町、日吉町、美山町の4町が合併して発足し、本年16周年になる。総土地面積は616.40 km²（京都府の13.4%）、京都府のほぼ中央部に位置し、北は福井県と滋賀県、南は兵庫県と大阪府の4府県と隣接している。緑豊かな自然に恵まれ、大半は丹波山地が占めており、北部には清流由良川が流れ日本海へ、中・南部を桂川が流れ、淀川から太平洋へと注がれている。いくつかの山間盆地で形成され、南部は亀岡盆地につながり、山陰内陸気候となっている。

南丹市北東部にあたる美山町は、山林、里山に囲まれた自然豊かな地域で、広大な芦生の原生林の源流域から流れる由良川、そして福井県境の分水嶺から流れる棚野川の流域に集落が点在する。

第1図 位置図



■ むらづくりの概要

1. 地区の特色

「下集落支援事業委員会」が進める美山町下区は、36世帯、人口68人、高齢化率47.1%と少子高齢化が進み、日本の原風景である「かやぶきの里」から更に約3km上流部で、支流知見谷川の流域にある集落である。

知見谷川は八ヶ峰岳からの清流が流れ、古来の若狭から京の都に続く西の鯖街道と呼ばれる街道筋にあたる。北前船で北海道や東北の海産物が、越前

から若狭へ、そして美山町へ、京の都へと続く街道では、様々な伝統や文化が受け継がれている。「京は遠ても十八里」と言われる様に、先人はこの街道筋を海産物を背負って歩いたと言われている。



写真 1 下集落全景

2. むらづくりの基本的特徴

(1) むらづくりの動機、背景

本地域は、美山町の中でも中心部から離れた地域で、少子高齢化が進み、小学校も統合・廃校となり、耕作放棄地が発生する恐れや地元行事の継続に支障が出ていた。

「かやぶきの里」には多くの観光客が訪れ賑わいを見せているが、更に奥地の下集落は寂しい状態となっており、地域住民も元気を無くし、集落の活力は明らかに落ちていた。



写真 2 不動尊の滝祭

また、地域の伝統的な祭りである「不動尊の滝祭」は、戦国時代の史実の中で継承されてきた神事でもあるが、毎月 28 日に実施してきた参道整備の出役者も激減するほど高齢化が進んでいた。

さらに、夏の盆踊りも途絶えて 30 年となっており、住民の中でも集落の維持と存続に危機感が広がってきていた。

そんな中、平成 25 年、南丹市の過疎化・高齢化対策を契機に、地区住民内の集落活性取組への機運が高まり、地区住民が生きがいを持って健康で明るく暮らしていける地域づくりを目指し「下集落支援事業委員会」を設立した。

(2) むらづくりの推進体制

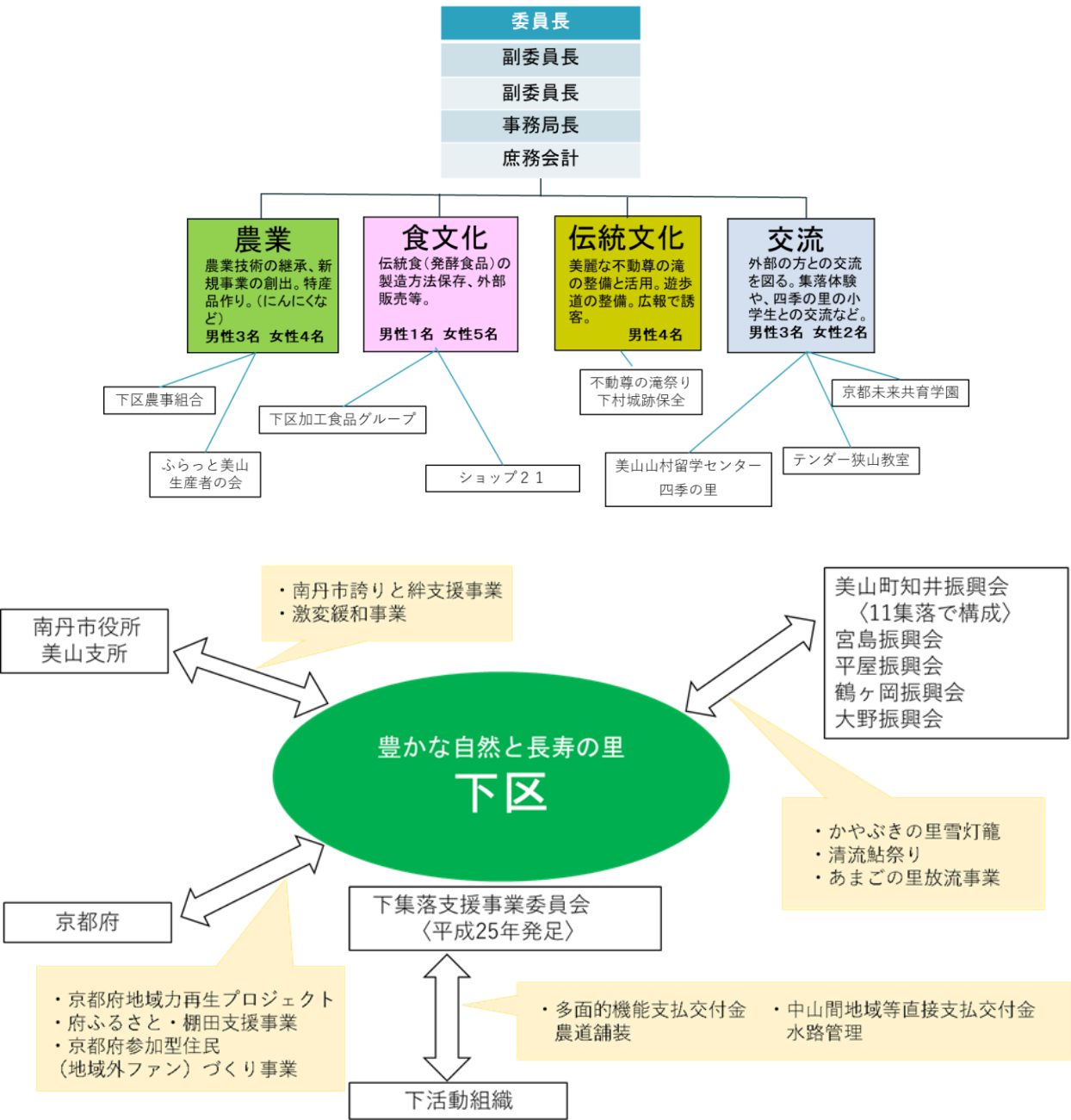
「下集落支援事業委員会」は、委員長のもと、副委員長 2 名、事務局長 1 名、庶務会計 1 名で構成され、そのもとに 4 チームを設置し、各チームには正副 2 名のチーム長を配置している。

また、美山町には 57 集落があり、複数集落で構成された自治組織の振興会が 5 つある。下集落は、11 集落で構成された知井振興会に所属しており、各振興会が連携して取り組む「かやぶきの里雪灯廊」イベントを始め、「清流鮎祭り」では、美山漁業協同組合と、また南丹市、京都府など行政機関とも様々な形で連携し事業を進めている。



写真 3 かやぶきの里雪灯廊

第 2 図 下集落支援事業委員会組織図



■ むらづくりの特色と優秀性

1. むらづくりの性格

下集落の貴重な有形無形の資源をどの様に活かして集落を活性化するかを有志で議論する所から始まり、その中で設立された「下集落支援事業委員会」では、4つのチームを編成し、集落全員で活動に取り組んでいる。

(1) 農業チーム

高齢化による耕作放棄に至る問題を解決するため、減農薬栽培による安全・安心の新鮮野菜を栽培し、販路の創出に成功している。また、担い手が下区で農業を始め、農地を守るのみならず農業体験イベントなどを企画し、農業の楽しさを内外に発信しており、今後の希望となっている。



写真4 九条ネギの苗植え作業

(2) 食文化チーム

「鯖のなれ寿司」、「鯖のへしこ」、「にしん漬け」などに加え、懐かしい「のし餅」の製造等に挑戦してきた。女性の視点で開発した、減塩や発酵を意識した体に良い商品は、下ブランドとしての人気を確立している。また、加工品の試作等を進め、顔の見える販売を模索し、現在も新たな販路の開拓を推進している。



写真5 鯖のへしこ作りの様子

(3) 伝統文化チーム

村のシンボル「不動尊の滝」に450年続く伝統文化の継承や、新たに発見された「下村城跡」の情報発信を通じた観光による活性化に取り組んでいる。また、近隣地区と合同で協議し、30年ぶりに盆踊りを復活させるなど、途



写真6 下村城跡由緒看板・案内掲示板

絶えた文化の復活にも力を注いでいる。山村の重要な産業であった炭焼きの再生では、若い女性グループへ講習を行うなど、技術の継承も進めている。

（４）交流チーム

集落が誇ることのできる様々な資源を広く発信し、地域外ファンづくりを行っている。集落内にある「美山山村留学センター・四季の里」の通所生、家族、卒業生等（美山山留ファミリーの会）をはじめ、京都市の未来共育学園の生徒や家族のほか、近年では大阪の学園と、集落住民が総出で交流を深めており、交流の輪を年々広げている。



写真７ 子ども達の農体験

２．農業生産面における特徴

（１）生産活動と後継者の育成

耕作放棄地対策も兼ねて農産物の栽培に取り組み、特に九条ねぎの栽培では、優良なねぎが順調に育つようになり、ＪＡ関連の販売所を中心に道の駅等へ供給するすべての野菜がほぼ完売する状況である。また、収益率の高いにんにく栽培を始め、新たな品種に挑戦した結果、出来も良く好評を得ている。



写真８ にんにくの収穫作業

水稲などの土地利用型作物については、各農家による営農活動を基本としているが、農業従事者の高齢化に伴う耕作放棄地を作らないため、「下集落支援事業委員会」の事務局長が機械作業を請け負い、農地の維持に努めている。最近では、民間企業への農作業委託により、集落の農地全域にドローンを利用した農薬散布を行っている。



写真９ ドローンによる農薬散布

下区農事組合では、後継世代へ新たに機械を導入し、農業の効率化・省

力化に取り組み始めるなど、新たな手法、技術を柔軟に取り入れることで、生産力の拡大と後継者の育成に繋げている。

また、下集落で農業を始めた若い地域おこし協力隊が地域に定着し、下地区の農地の半分を耕作、農業指導に精を出しており、後継者として活躍している。

（２）女性の経営参画の促進状況

女性が中心となり加工品の商品化に励んでおり、「鯖のなれ寿司」は独特の味と香りのある品に仕上がり、町内のショップで完売するまでに至っている。米糠と秘伝の調味料で鯖を漬け込んだ「鯖のへしこ」は、5年間の研究を重ね商品化した結果、地元の道の駅での売れ行きも順調である。また、「にしん漬け」については、数年前から生産技術も向上し、商品として道の駅で販売したところ、こちらも好評で完売するまでになっている。そのほか、にんにくや九条ねぎなどの農産物や、地元産もち米を使用し5色の味でパック詰めした「のし餅」などを販売している。



写真 10 下区食品加工センター

これらの加工品の商品化においては、次世代の女性を中心に事業を進めており、技術の継承など世代間の融合を図ることができている。発酵加工食品は賞味期限が短いため、生産量を増やす事は難しいが、希少な逸品として付加価値の高い商品づくりを丁寧に行っている。また、試食会の開催や地域外の方を招いた交流会での情報発信に注力しており、今では商品を目当てに地域外（主に京阪神）からの来客も増えてきている。



写真 11 のし餅のパック

なお、地域の公民館に食品加工所を建設し、大変便利な環境下での商品づくりが可能となったことから、チーム内の活気も継続している。

3. 生活・環境整備面における特徴

（１）伝統文化の継承

古来からの生業であった炭焼きの復活に向けて、炭焼き窯を一から作り、

技術を持つ高齢者を中心に質の高い木炭の製作に取り組んでいる。近年のアウトドアブームもあり、現在では道の駅や宿泊施設から注文を受けるようになっている。こうした技術の継承は、地域内のみならず、炭焼きの奥深さに魅せられた若い女性グループへの講習を実施するまでになっている。



写真 12 炭焼きに魅せられて

また、毎年6月28日に行っている「不動尊の滝祭」に向けて、下集落出身者に「ふるさと同窓会」として葉書で呼びかけ、地域に集まる機会をつくり、出身者の帰省や縁故者が参加するきっかけになっており、賑わいの一役を担っている。

「下村城跡」では地域住民一丸となり整備作業を行い、地域外から訪れた観光客が城跡として認知できるよう看板を設置し、美山自然文化村や「かやぶきの里」を訪れる方への周知・広報を行っている。

こうした取組は、地域住民の地域への想いを深め、環境美化意識の向上にも繋がっており、集落内を並走する府道八原田上弓削線^{はらだかみゆげ}と知見谷川の日常の清掃活動にとどまらず、一人暮らしや高齢者世帯の見守り活動にまで発展している。

(2) 都市住民との交流

平成10年の開設以降、下集落全体で運営や管理をしてきた「美山山村留学センター・四季の里」は、令和4年度に25周年を迎え、卒業生も188名を数える。当センターには、兄弟そろって入学される子、集落での生活が好きで5年間も在籍される子、巣立っていった子どもが再び美山町に移住し、地域の男性と結婚、出産を経て子育てに励む姿も見られるなど、こうした姿から地域も元気づけられてきた。しかし当センターも令和4年度で閉所が決まり、一時代の使命を終えることとなった。

令和元年から始まった京都未来共育学園との交流では、これまでに計8回の



写真 13 留学センターの子ども達



写真 14 稲刈り体験の様子

交流会を実施している。毎回子どもたちの輝く瞳に刺激を受け、地域住民も気付かなかった集落の新たな魅力の発見に繋がっている。令和4年度からは新たな展開が生まれ、同学園との共催で下集落の農産物を販売するマルシェ「美山夢市場」(同学園の子どもが命名)がスタートしている。さらに、同学園との交流をきっかけに出会った大阪のフリースクール



写真 15 ロケット教室の様子

((株)ファースト・ペンギン)との交流も始まり、農業体験用の農地を拡大させる準備も進めている。

こうして都市住民と定期的な交流の場を持つことにより、地域住民の活気や「おもてなし」の心、地域への誇りを持続させており、「下集落支援事業委員会」の取組は、地域住民だけで完結することではなく、地域外の方々との関りの深い内容となっている。

こうした各種取組を進める過程で生まれつつある効果は、集落の絆が深まってきた事である。世代を超えての深い交流や語らい、笑顔がこれまで以上に増え、地域住民に誇りと自信が生まれ、先人が大切にしてきた伝統や文化、技の継承を通して、集落を見つめ直す契機になっている。また、下集落全体で「美山山村留学センター・四季の里」をサポートしてきたことで、集落自体も成長し、地域外を受け入れる寛容さや柔軟性を備えてきており、地域外を含め、様々な方々との交流を通して新たな風が入ることで、集落の活性化に成功している。高齢者は「自分にもまだまだ出番がある」といった使命を持って、積極的に取り組んでおり、まさに集落のテーマ“長寿を目指す里・下”を実現した取組である。



写真 16 寮母さんが一人一人心を込めて作成した山村留学卒業生 188 名の人形